記事ID:K2020100100000020200

主体性回復
■首里城再建を考える への道 ■3■

永津 禎三

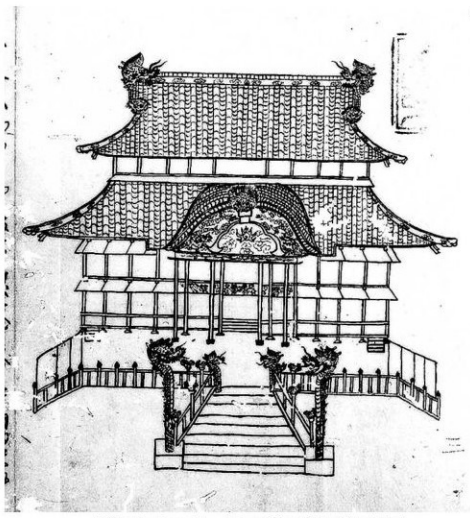
ながつ・ていぞう　1953年生まれ。琉球大学名誉教授。愛知県立芸術大学大学院修了。浦添市美術館などで個展開催。論文に「橋の系譜」「内間安理の芸術―その絵画空間を考察する」「近代西欧文化圏外の視覚表象の構造」（いずれも琉球大学教育学部紀要）などがある。

絵図は向きを示さない
西村氏は復元に不可欠

大龍柱 ㊦

首里城彫刻群復元の中心的な存在だった西村貞雄氏ご本人に首里城を案内していただける機会があった。2019年7月15日、炎天下の中を西村氏は案内してくださった。1992年正殿の復元に始まり、27年を経てやっと19年2月にほぼ全てのエリアの復元が完了したこの機会に誘ってくださったのだと思う。

西村氏は強い日差しを全く気にすることもなく、喜々として惜しみなく、復元作業やその後の調査研究で得た知見を披露してくださった。朝から始まったその見学は、お昼の休憩を挟み、最後は玉陵にまで足を伸ばし、夕方になって閉園の時間を迎え、まだまだ話し足りなげな表情を浮かべながら「また機会があったらね」とおっしゃった。西村氏にとっての首里城。ライフワークとはまさにこのことだなと感動した。



『尚家文書「百浦添御普請絵図帳」:「寸法記」と図は同一』

「また始めれば良い」

19年10月31日早朝、旅行先の佐賀県のホテルで何気なくテレビを付けた。その首里城が燃え、崩れ落ちていた。その夜、帰沖してすぐに龍潭から首里城の方角を見た。照明を消され、往時のシルエットはそこになかった。自ら感じる喪失感よりも、復元に尽力されてきた方々の悔しさは想像を絶するものがあると感じていた。復元とはいえ、精魂込めて作り上げてきた作品が灰塵と化してしまったのだから。ところが、新聞紙上に載ったお二人のお話、を、つい最近になって知った。信じられないことだ。

西村氏欠いた復元とは

この委員会の委員長である高良倉吉氏と西村氏は、一対の大龍柱が向かい合わせか正面向きかで意見の相違があったと聞いている。まさか、意見の異なる者を排除しているはずはない。異なる見解を議論し合うことで深化するのは学術の世界では常識のこと、と思いつつ、なぜ、このような琉球文化に関わる（そして皆が関心を持ちやすい）問題を公にも広く議論するきっかけとしないのか、全く分からない。

西村氏は68年東京芸術大学保存修復科で仏像の修復に関わったのを契機に、文化財研究所で重要文化財の復元、沖縄に戻ってからも末吉宮の復元、園比屋武御嶽石門彫刻の復元など、そして、平成の首里城正殿実施設計委員と彫刻部会の委員を務め全力で復元に取り組んできた。委員の任期を離れた後もこれらの研究を地道に継続してきた西村氏だからこそ、今回の復元に豊富な経験を生かしてもらえると思っていた。

火災の中に凛と立ち残っていたあの大龍柱は、西村氏の彫刻家としての研究と解明がなければそこに存在していなかった優れた造形物だ。いや、大龍柱だけではない、首里城の彫刻群全てに関与し、膨大な資料を持ち、深い知見を有している西村氏が今回の復元に参加しないとしたら、そのような復元に意味はあるのだろうか。

「寸法記」を誤解

絵画の制作者、研究者としての私の立場から、疑問を一つだけ述べたい。

高良倉吉氏は『琉球王府』（総監修・海洋博覧会記念公園管理財団）において「大龍柱の向き」として、次のように記述している。

「問題の大龍柱の向きを示す絵図を見ると明らかに向き合っており、疑問を挟む余地は全くない。（中略）これほどの精度の高い仕様情報を批判する根拠は全く見られない。仮に百歩譲って絵画手法の誤差を勘案するとして、実際は正面性を保持していたはずの大龍柱を向き合う形に表現したまでだ、と解釈した場合、ではなぜ小龍柱も向き合う形で描かれるのか、この矛盾」という記述はつまり、大龍柱も小龍柱も横向きに描かれているのに、なぜ大龍柱だけが正面向きだと言えるのか、と指摘しているのだろうか。また、「この部分についてのみ正確さを欠いた」とは、大龍柱が前向きだったのなら、ちゃんと正しく前を向いた形で描かれているはずだ、ということを述べているのだろうか。しかし、これらの指摘は全くの的外れである。

おそらく、高良氏はこの『百浦添御殿普請付御絵図并御材木寸法記』の図を、近代になってからの図面である『国宝建造物沖縄神社拝殿図』と同様、三面図の正面図（正面から見た形）と解釈しているのだろう。しかし、18世紀の琉球で描かれたものが、この三面図の正面図としての約束に沿って描かれているはず、というのは誤解である。

絵図とは

投影法や透視図法の約束が成立していない地域や時代の絵図では、「横向きの図」が正面から見て「横向きに立っている」ということにはならない。形は、認識されやすい向きで描かれているだけで、その向きに立っているという意味まではこの絵図は持っていない。絵図とはそういうものなのである。

古代エジプトの壁画を例にあげよう。古代エジプトは高度の文明を達成したことで広く知られているが、その壁画やレリーフに描かれた人物像は、顔は横向き、目は正面向き、肩も正面向き、腰はやや斜め、そして足に至っては二本とも親指側から見た横向きの図である。これを現代の人が普通の感覚で見て不思議だと思うとすれば、それは一つの方向から見た形に統一するという（近代になってからの）約束が古代エジプトにはなく、形はそれらが最も認識されやすく美しい向きで描かれ、それらがそれぞれの位置に描かれているという古代エジプトの描き方が近代以降の約束とあまりにも違うからである。

もしも、近代的な見方こそが唯一で正しいと言い張る人が、この古代エジプトの壁画を見て、古代エジプトには、右足が2本の人と左足が2本の人が暮らしていたと言ったらどう思うだろう。その人を説得するために、ヒトの生物学的、発生学的、機能・構造的な証明をしてヒトの形としてあり得ないことを伝えなくてはいけない。

西村氏が地道に復元制作し実証しようとしている龍柱の造形的な意味、龍脈を踏まえた建築物の総体から導き出される大龍柱の形態の研究は、まさにこの証明と同様の、しかし結果として、琉球の造形文化の特質を探る、豊かなそして意味ある研究となっているのである。

（随時掲載）

無断複製・転載を禁じます